

芸備線ストロール④ 比婆山駅

「神話の息吹と

戦国の兵士たちが瞑る場所」

芸備線ストロールも今回で4回目。最初はとにかく芸備線に乗って、降りた駅の周囲をぶらついてレポートしてみよう。前回は大雑把な企画を立てたが、どうにか形が決まってきた。前回降りた駅まで車で行って、そこから一区间列車に乗って次の駅で下車。駅の周辺をぶらぶら散策したあとで、車を

を停めている駅まで歩いて帰るのである。出発は1月10日(月)、降雪が心配なので、古本屋の定休日

で晴れた日に、なるべく早く取材を終えるように心掛けた。備後西城駅の前の駐車場に車を停めて、7時56分発の備後落合行きに乗った。西城紫水高校の生徒たちが

降りると、自分も含めて乗客は五人だけ。一人はスキー板を立てかけている。他の人たちは鉄道ファン？ だとしたら、お目当ては次の乗り継ぎ駅である備後落合駅で、比婆山駅で下車したのは私一人だった。運賃は150円で、今までの190円よりも安い。距離が短いのだろう。

ホームの駅舎の廂（ひさし）の柱に、自然木を使った「国定公園・比婆山」の古い看板があるのだが、雪の結晶のオブジェで飾られている。地元

の人の愛情が伝わってくるようだ。駅舎に隣接する駅員の宿舎も、無人駅になってからは地域の集会所として大切に利用されている。別棟に、簡易水洗トイレがあるのもありがたい。

駅の開業は1935年（昭和10年）、当初は熊野神社参拝の最寄り駅ということで「備後熊野駅」という名前だった。戦後は、熊野神社の参拝者よりも登山客が多くなったので、昭和31年に「比婆山駅」に改名。「古事記」に登場すると言われる比婆山や、その遥拝所（遠くから拝む場所）である熊野神社については、武田祐三氏の「芸備線・中国山地の沿線物語」（シンセイアート）に詳しい。

熊野神社まで約11キロメートル。今回は断念したが、一度は参拝することをお薦めする。天空に突き出た巨大杉の林の中にある神殿は、まさに神話の世界。人間よ驕るなかれ！ ちっぽけな自分の存在を思い知らされる。

駅舎の反りのある神社風の屋根は、熊野駅の名残りだろう。「比婆山駅」の看板（写真上）は、古い時刻表板を再利用したもので、鉄道ファンにはかなり有名だ。表面の塗装が風化して、時刻表の文字が浮き





出ている。それで場所が推測できるらしい。岡山駅の時刻表（1960年5月〜1961年10月）だったというのが、ネット検索での結論である。

駅舎の壁の貼り紙に、駅前にある田盛商店で駅のスタンプを管理していると書いてある。8時過ぎでも開店しているのはありがたい。1970年（昭和45年）に設置された「DISCOVER JAPAN」のスタンプで、収納箱に「昭和46年」と書かれている。スタンプを委託された年である。田盛商店では、平成20年頃まで乗車券の販売もしていたそうだ。

店頭で販売していたポストカードを購入。四季の中国山地を背景に、芸備線走る列車が撮影されている。比婆山駅の写真は雪の中の遠景で、しんとした早朝の静けさが伝わってくる。1枚百円で全部で10枚、抒情溢れる作品ばかりで、あらためて紹介させていただければと願った。

国道183号線を西城駅方面に下ると「蟻腰城跡」の案内板が見える。左に折れて芸備線の踏切を渡ると、西城川の橋がある。川岸が人工の護岸ではなく切り立った自然の岩で（一頁写真下）、上流部に来たことを実感。橋を渡って直進すると、小さな丘があるのだが、それが中世の山城跡で

ある。比婆山駅から蟻腰城跡まで、歩いて1キロくらいだろうか。「西城川と八鳥川の合流点に突き出た小山で、後方陣ヶ丸に続く地形から名付けて蟻の腰という。大永3年（久代記）宮氏の重臣東兵部政幸の居館。政幸はざんげんにより大富山城主景盛に滅された。」と解説版に書かれている。

西側斜面におびただしい数の墓石が密集している（写真上）。城址跡のそばにある極楽寺（東氏の菩提寺）でその由来を尋ねると、「備北曹洞宗寺院誌・第八教区」を紹介してもらった。

その本によると、この墓石群は「無縁壇」と呼ばれ、宮景盛に滅亡させられた東氏の兵たちを弔ったものだという。「昭和十四年一月、当山十四世我山道頭大和尚、無縁壇趣意書を作製配布して、当地方有志の喜捨を求め、昭和十五年四月二十六日に工事完成、開眼式を執行」とある。墓石の総数515基、戦国時代の兵（つわもの）どもが瞑る場所である。丘に登ると、東政幸の墓がある。

国道に戻って西城駅方面に向かうと、美古登（みこと）小学校が見えてきた。体育館の前に、太陽の塔のミニチュア版が建っている。大阪万博の岡本太郎氏の作品を模したもので、一九七〇年の万博があった年の秋に、卒業記念として制作された。万博に行っていない私には、初めて見る「本物」だった。

武田氏の「芸備線」によると、「美古登」という地名はイザナミノミコトに由来するらしい。神話の名前を留めた美古登小学校も、児童数減少で昨年3月に閉校になっている。

国道を歩いてみると、特色のある屋根をした建物（写真下）が多いことに気づく。屋根の中央部分に、小屋のような屋根が突き出ている。「芸備線」では、「はふ」と呼ばれていて「破風」の字ではないかと武田氏は推測。囲炉裏や勝手場（台所）の煙を出す役目を担っていた。

昔からあるもんだから、壊す必要もないと思っただけ」

はふのある家の人に話を聞いた。今では囲炉裏もなくなってしまったが、屋根を改修したときもそのまま残しているらしい。その家の蔵の屋根の廂は、壁から突き出た何本もの角材で支えられている。雪の重みに耐えるためで、雪深い土地であったことを示している。

比婆山駅から備後西城駅まで3.2キロ、歩いて四十分弱と距離が短い。国道を離れて山の方に足を伸ばすと、山林の裾野に小道がある。コンクリで舗装されているのだが、年月を経て苔むして風情がある。人工物も自然の一部なのである。

「安原旅館・珈琲屋洗心館」を再訪、馥郁たるコーヒーで取材を終了した。（次回は備後落合駅、情報提供を歓迎します。）

郷土の本棚⑮ (文責・赤川仁洋)

「ミニ太陽の塔物語」

黒長澳^{ふかし} 著

「詩集 K A I T U B U R I」(庄原詩話会)の第44号(平成29年12月発行)に掲載されている。副題に「記録と詩で綴る制作から修復までの軌跡」。著者の黒長澳氏が担任していた美古登小学校の六年生の卒業記念で、ミニ太陽の塔が作られたのは、大阪で万国博覧会があった一九七〇年の秋。夏休みに万博へ行った子どもは、

写真やスケッチで細かいところまで記録して帰り、父母からも多くの写真や資料が寄せられた。それらをもとに設計し、九月十四日に着工した。毎日放課後、子どもたちは二、三時間作業に汗を流し、父母も四、五人ずつ交代で応援、保護者の中には大工さん、左官さんもいて経費は材料代だけで済んだという。記念碑は



美古登小学校は昨年3月に閉校になった。

石材店を営む保護者が、花崗岩の碑を建て、表は「昭和四十五年度卒業記念太陽の塔」、裏面に卒業生三十三人の名前を刻んで寄贈してくれた。

そして、農繁期が終わった十月、思い出や希望を書いた作文や図面などを塔の中に封じ込め、成人したのち再会して開封する約束をし、父母も出席して除幕式が実施された。それから四十七年後の二〇一七年、風雪に耐えて傷んだミニ太陽の塔に「復活の時」が訪れる。最後の詩を転載させていただく。

級友の絆

一九七〇年に大阪万博があったこの年度に卒業してまもなく半世紀になる卒業生卒業記念につくったのは万博の象徴高さ四・五メートル両手を広げた長さ三・五メートルのミニ太陽の塔長年の間に老朽化が進んだ純白だった色はくすみトタンに金粉をぬった顔がはずれかけるなど安全面から解体か修理かが迫られた

現状を聞かされた埼玉にいる卒業生代表になって級友たちに修復を呼びかけた

修復のための費用約四十万円みんなが出し合うことに思いが一致した
まもなく代表のところへお金が振り込まれた
卒業生は三十三人
乳がんを病んでいた友がいた
九州にいる女性は友を湯布院へ誘った
彼女は最後まで友に寄り添った

級友の絆は固かった
代表のところへ届いた振込用紙に亡くなった友の名前があった
級友が友の思いを基金に託したのだ
修復祝いには当時の担任の私も招かれた
集まったのは二十人
市内をはじめ関東や九州からかけた
輝きを取り戻したミニ太陽の塔
青空に映えて美しかった
記念の写真撮影に
すてきに年を重ねた卒業生の笑顔が
はじけた

「植物画とは何か」
—日本の植物図譜を中心に— (3)

「本草綱目」に記載されている薬物はすべて中国産であるから、その薬物が日本産のどれに相当するか、「本草綱目」の記述と稚拙な図から判断すること難しく、それを理解するための解釈学と文献学が主流であった。

「本草綱目」が日本へ輸入されてから、102年目の1709(宝永6)年に貝原益軒(1630～1714)が著した「大和本草」が刊行された。この「大和本草」は「本草綱目」の分類配列・記載と異なる独創性の高い著作で、これは益軒が長年にわたる観察に基いて日本産の動植物など記述しているため、本草学から博物学への転機をもたらせた名著といえる。そして、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」は本草学から博物学へみごとに転換したといえる。

本草学と別に江戸中期、花卉園芸が盛んになると、伊藤伊兵衛は園芸植物の種類・培養法をまとめた「花壇地錦抄」を1695(元禄8)年に刊行する。これには図はないが、「花壇地錦抄 四五 草花春の部」で「金鳳花 花金色せんよう 一重あり 銀鳳花というのは一重」は「草花絵前集」にある。「金鳳花(きんふうげ、キンポウゲ)の図(図1)が載る「草花絵前集」は、伊藤伊兵衛が描いた四季の草花100余種をまとめて1699(元禄12)年に刊行されたものである。福寿草は図2、図が版刻されたのはこの書が最初である。いずれの図も写実的で詳細に描かれている。

草花絵前集が出版されてから、55年後の1755(宝暦5)年に橘保国が草花草木185種を描き、解説を加えた「画本野山草(えほんのやまくさ)」を著す。これにはトケイソウ、キョウチクトウ、キンセンカなどの外来園芸植物が多く載せられており、ガンピ(図3)は中国浙江あたりの原産、江戸前期の正保の頃渡来、享保年間(1716～1736)には50近い品種が作られていた。橘保国は狩野派の画家で法橋に叙せられた人物であるから、図は見事な出き映えであり、彫師藤村善右衛門、藤江四郎兵衛の木版彫刻も優れている。葉の表裏を黒と白に分けて表現する技法は、「花彙」、「草木図説」へ受け継がれていく。

余談であるが、ツユクサは「草木絵前集」と「画本野山草」をヨーロッパへ持ち帰っている。

3. 岩崎常正(灌園)の「本草図譜」

岩崎常正(灌園、1786～1842)が著した「本草図譜」は、日本最初の植物図鑑である。名前は常正(つねまさ)、灌園(かんえ)は著作に用いた号、1786(天明6)年に江戸下谷三枚橋(現在の御徒町)に生れ、鎗術を小野安三郎、剣術を今枝佐仲、学問を山岡宇之助、本草を小野蘭山に学んだ。

小野蘭山(1729～1810)に岩崎常正が本草を学んだということは、注目すべきことで、それは小野蘭山が当時、最も著名な本草学者だったからである。小野蘭山は1753(宝暦3)年、京都で塾を開いて本草学を教えていたが、1798(寛政10)年3月、幕府に召し出され、医学館で本草学の講義を行なうことになったから、岩崎常正は医学館で小野蘭山の円熟した晩年の講義を受けたと推定される。

小野蘭山は本草学の講義に「本草綱目」を使っていたが、弟子たちが筆記しているものがまちまちなので、定本を作ることになり、蘭山の口述を孫の小野職孝(もとより、蕙畝、?～1852)に筆記させ、その筆記を小野蘭山が校正し、完成させたのが、「本草綱目啓蒙」である。「本草綱目啓蒙」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

は小野蘭山 74 歳の 1804（享和 3）年から 1806（文化 3）年にかけて刊行された。蘭山の死後もたびたび刊行され、1847（弘化 4）年、「重訂本草綱目啓蒙」（岸和田本）が出版された。



図 1 金鳳花（東洋文庫 268 による）



図 2 福寿草（東洋文庫 268 による）



図 3 ガンピ（八坂書房版による）

「つれづれ歌談」②〇

松岡 初枝

歌舞伎を観に行った時、冬景色から春の舞台に変わり、一面の花の上にハラリ、ヒラリと雪の残りが落ちて来たことがあります。雪籠を片づけた時の出来事です。自然でも同様の事があります。

・わが背子（せこ）に見せむと思（も）ひし梅の花それとも見えず雪の降れば

山部赤人（やまべのあかひと）
あなたに見せようと思った梅の花の上に花がわからない程雪が降ってしまいました。

赤人が女性の立場で詠んだ歌ですが、当時梅は白梅ばかりなので、雪と同化したようです。春が来たかと思ったら名残雪が降る。まさに三寒四温の頃の空模様がよくわ



かります。赤人は、柿本人麿呂の後の宮廷歌人ですが、人麿呂は持統朝、赤人は聖武朝の歌人で、自然を優しい眼で詠んだ歌人です。

山部赤人

ぬばたまの、は黒や夜、闇などに掛かります。ふけゆく夜の静けさに、久木の繋げる清らかな川原で、千鳥がしきりに鳴く。

赤人の歌は、どこか清らかさがあります。

・わが園に梅の花散るひさかたの天（あま）より雪の流れ来るかも

大友旅人（おおともたびと）

旅人が太宰府の長官の時の梅花の宴、梅を題材に官人達が作歌しました。旅人は六十六歳、二年前にこの地で妻を亡くし、傷心の老いの身は、梅の花びらが天から流れ落ちる雪のようだ、と。亡き妻が天から雪に化身して落ちて来たと思っただけでしょうか。当時では長命の旅人が、客死した妻に思いを馳せ、それを慰めるような憶良の歌もあります。

残された身の辛さは今も昔も同じようです。

風神さんが初めて店に来たのは、正月の一月二日だった。

古本屋は年中無休、そんなイメージがあつて、開店時にそうしようかとも考えたのだが、やっぱり休みは必要だと思ひ直して、火曜日を定休日にした。雑事や古本の在庫整理に追われて、隔週の月曜日も休むようになり、やがて毎週、月、火曜日が定休日になった。

留守番もない一人店主の限界だろうか。今は、在庫整理のために二月を丸々休業している。理想が現実、徐々に浸食されている。せめてもの抵抗で、年末年始も定休日以外は店を開けている。

まだ元旦は、初詣に行った帰りに「あれ、店が開いている」と驚いて入って来る客が何組かいるのだが、二日になるとそういう客もいないので油断していた。夕暮れ時、晩飯は何にするかと冷蔵庫を確認して店に戻って来ると、見知らぬ人物がいたので思わず悲鳴を上げた。

「失礼しました」

「ああ、本当に失礼だよ」

その人物の風体も相当に失礼だった。ネズミ色のパジャマに、女性用のオレンジ格子の派手な綿入れを羽織っている。サンダルのアングルバ

ンドに刺さった298円の値段のタグがそのままだ。

「正月に店を開けても、客なんか来ないだろ？」

無礼な物言いである。つるんとした顔は皺も鬚も無く年齢不詳、色白、というよりは白く澱んでいる。

「おかげさまで、いい感じで暇ですね」
半分皮肉で、半分本音だ。いつもよりも寛いでいる自分がいる。

無人島支店

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑥5

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「それはいいなあ。客の来ない古本屋か」
とろんとした目を輝かせた。

しばらく話してみても、彼が長らく実家の自室から出ていないことを知った。いわゆる引き籠りである。ぶっきらぼうな物言いも、多分に緊張の裏返しがある。

相当な読書家で、気になる本はインターネットで購入して読んでいた

が、金額が高くて家族にクレジットカードを解約されてしまい、著作権の切れた古い作品の電子書籍や、プロでない作家予備軍がネット上で発表しているウェブ小説、つまり無料のものを読み漁っているという。

「でも、やっぱり本はいいよね」
「紙の本のこと？」
「うん、重さがある」
「それは本だからね」

なかなか良いことを言う。「だけど、人が来るといやだな。客が来ない古本屋だったら、おれにもできるんだけどな」
無茶苦茶な論理だが、気持ちは理解できた。都会の繁華街であれば、古本屋に限らず、人付き合いの苦手な自分が店を開こうなどとは考えなかつたはずだ。山間の過疎地の寂れた商店街だからこそ、古本屋をやろうと考えた。

「無人島にでも行ったらどうだね」
冗談で言ったつもりが、彼の瞳が輝いた。

「それはいい。だけど、雨露がしげる場所がないと本がだめになるから、かつては人が住んでいたことのある無人島がいいな。廃墟をどうにか改装して古本を並べる」
「ヤギが買いに来てくれるかもしれないぞ。これは上質の紙だ。今晚のメインディッシュにしよう」

うわの空で、皮肉が聞こえていない。「うん、いいぞ。客は来なくても、来る可能性があるだけでいいんだ。船が難破して、乗組員が漂着するかもしれない。無人島での生活は退屈だから、おもしろい本が必要になる」
「すぐに帰りたいと思うんじゃない」

「文字に触れることができるもの」
「うん？」
「文字に重さがあるんだ」
「うん？」
「文字に触れることができるもの」
気に入った文章に出会うと、その本の活字を慈しむように、指先で撫でるのだという。ネット小説に精通した彼が、意外とアナログなことに固執しているのがおもしろい。

「古本屋はいいよね。本に囲まれていると安心だもの」



「同じ本ばかり並べていてもつまらないな。たまにはおれも違う本が読みたいもの。あんたが年に一度、本を届けに来るのはどうだろう？ そのためには、ここの支店になってやってもいいぞ」

古本のぎっしり詰まったトランクを抱えて、チャーターした漁船に乗っている自分の姿を思い浮かべた。

「悪くないな……」

そう呟いてしまった。

ジジババ島、風神さんは自分の島のことをそう呼んでいる。島民全部で三十人に満たない瀬戸内海の離れ小島、七十歳過ぎの住民が九割を超えている。

あれから何度も話し合って、さすがに無人島への移住は無謀だと彼も納得してくれた。人口の少ない島を選んで探すと、無人となった家を無償で提供してくれるという島を見つけた。それでも、接客はできないと尻込みする彼に、だったら無人販売にすればいいと提案した。百円ショップのように、一冊全部百円にする。出入り口に料金箱を設置して、セルフサービスで代金を入れてもらう。

とんとん拍子に話が進んで、どら書房ジジババ島支店が誕生した。風神さんは、店の奥に籠っているつもりだったのだが、ジジババ達が島では貴重な「若手」を放っておいてくれるはずがない。あれこれと、島の行事に強引に連れ出すようになり、いつの間にか彼の方もすっかり馴染んでしまった。今では民生委員まで引き受けて、島民の世話をしている。

古本屋の方も、ネット販売を取り

入れて、そこそこ収入がある。いらなくなった古本を引き取りますと告知したら、離れ小島の古本屋というのが話題になって、全国から古本が送られてくるようになったという。それを整理して、ネットで販売するのである。

周囲が海なので、釣り糸を垂れば食材には困らない。野菜は近所のジジババが持つて来てくれる。お惣菜の差し入れも頻繁にあるようだ。お金がなくても暮していける場所なのだ。

年賀状に、ヤギと一緒の写真がプリントされていた。周囲の雑草を食べてもらうために飼い始めたのだが、人間のエゴだと、名前を付けていないのが彼らしい。遅しく日焼けした顔は、壮健な四十男の顔だ。そういうえば、未だに彼の年齢をわたしは知らない。

「よし、やるかー！」

二月になって、在庫整理のための休業期間に入る。溜まりに溜まった古本を分類して、「商品」に仕上げる。面倒なものは、ジジババ島支店に送ることにする。

さて、肝心の支店の視察であるが、コロナ禍もあって、まだ実現していないのである。

FEBC
1566

Listen to His voice

あなたによりそろ

☎180-8790

武蔵野局 郵便私書箱36号

キリスト教放送局

日本FEBC行

●AMラジオ1566kHz 毎日夜9時30分~10時45分

●インターネット放送 www.febcjp.com [スマホで聞ける!]

キリスト教放送局 日本FEBC

FEBCは旧新約聖書を神の言葉と信じ、使徒信条を告白する超教派のキリスト教放送局。
選りすぐりの20以上の番組を毎日放送。無料聖書通信講座やメールによる相談も。

《PR 広告》
庄原FEBCの会

特別連載⑤

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

五月五日端午（たんご、男の節供）

端午は月の初めの午の日のことを言い、中国では月と日の数が重なる日を祝日にする風習があり、五月五日を端午として祝うようになった。また、五日には「葉狩り」と言って山野に出て葉草を摘んだり、蓬（よもぎ）で作った人形を家の戸口にかけたり、菖蒲酒を飲んだり、粽（ち

まき）を食べて災厄を祓う行事が行なわれた。

端午は男の子の祭日と理解されているが、古くは女の子の祭りでもあった。「女の家」「女の夜」と言っても、菖蒲で作った小さな小屋に女の子が入って、一晩中ままごとや遊戯をした日でもあった。

古く日本でも五月を悪月（あしげ



「端午の節句図」（与謝蕪村筆）

つ）・物忌（ものい）み月とし「さつき忌み」と称して、田植が始まる時期に早乙女が家に籠って身を清め、田の神を迎え祭るといふ行事があった。田植をする早乙女、つまり若い女性が穢れを祓い身を清めた。五月の節供はもとは女性の節供であった。五月の節供は、日本古来の「さつき忌み」の風俗と中国伝来の端午の節供が一緒になったものとみることが出来る。

これらが飛鳥時代に日本に伝わり、貴族の間からしだいに民間へと普及していった。日本でも菖蒲や蓬を軒につるしたり、粽や柏餅を食べお祝いをした。また、菖蒲も葉草の一種であり、菖蒲を入れた菖蒲湯に入る地方もある。

菖蒲は尚武（武士を尊ぶ）に通じることや、この日に行なう土竜（もぐら）などを地中から追い出し、作柄の豊凶を占う印字打ちや石合戦などがいかに勇ましいかんじがすることから、武家社会に入ると、雛節供と対照的に、男の子の節供となっていた。

江戸時代になって、五節供の一つとして重んじられ、庶民も武士の真似をして祝った。明治になり、立身出世するようになると、鯉のぼりや武者

人形などが普及した。

※粽や柏餅を食べる風習について

中国の楚（そ）の国の高名な詩人屈原（くつげん、紀元前三四三〜二七七）は国王の側近として仕え、人々からも慕われていた。しかし、陰謀のため国を追われ、ついに五月五日に汨羅（べきら）という川に身を投じてしまう。屈原の死を悲しんだ人々は、その霊を弔うため命日になると、（川に住む龍に食べられないように）「龍が嫌う茅（ちがや）の葉で粽を包み糸で結んで川に投げ入れた」。それで、五月五日に粽が食べられるようになったと言われている。

柏餅は、柏が新しい葉が生えないと古い葉が落ちないことから「家督が途絶えない」縁起物として食べるようになったと言われている。

※鯉のぼり

江戸時代に町人階層から流行り盛んになった。鯉は生命力が強いことと、中国の黄河上流に竜（龍）門という急流があり、「そこを登った鯉が竜に化ける」という故事「登竜門」から、鯉に出世を願ったのである。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

海外旅行ツアー「コンダクター・エピソード」③

ペルー編2・「チチカカ湖で証城寺の狸囃子」 山崎 允まこと

三日目は、ホテルをチェックアウトしてチチカカ湖へ向かうため、ホテル側にモーニングコールとお客様の部屋からスーツケースを集めてもらう「バゲジ・コレクション」の手配をした。お客様が朝食をとられている間に各部屋からスーツケースがロビーに集められ、出発前に日本に

かけた電話代、アルコール代など個人的な費用を清算してもらうことをお知らせする。

今日の行程では途中、標高4300メートルの難関、ラ・ラヤ峠を越えなければならない。列車内は与圧されていないので、高度計の代わりに網棚に吊るした「かつばえびせん」で海拔の上昇を実感してもらう。気圧が下がれば、袋が膨らんでくるのだ。人によって症状は違うが、頭痛、腹痛、息苦しさが生じることがある。チチカカ湖の海拔は3800メートルで、お客様の夕食時の顔色はさえないかった。希望者には酸素ボンベを部屋に届けるよう手配した。車輪



付きの大型ボンベをボーイが仰々しく部屋まで届けてくれた。初めて来た時の私も、体が疲れきって横になったが呼吸困難になり、眠るどころではなかった。窓越しに湖に写る月は、まるでインカ帝国を崩壊させたスペイン人に対する、謎を



秘めたサクサイアマンの祟りではないかと思えた。

翌朝、団員の中の医師が誘眠剤をそっと手渡してくれた。その後、何事もなかったように行動することが出来た。あとでわかったことだが、ツアーコンダクターの中では、この苦しさがあるのでチチカカ湖は敬遠され、私におこぼれが廻って来たのだった。しかし、あの苦しみは耐えながら見た湖畔の月明かりは忘れられない光景で、その後も数回、同地を訪問することになった。余談だが、

再訪時にはペルーの「広島県人会」に東城の竹屋饅頭と地酒を数回持参して、喜んでいただいた。

チチカカ湖のチチは父、カカは母のことだと勝手に思っていたが、チチはピューマ、カカは岩であることを教えてもらった。湖底に生える葦（トトラ）を約60センチ位に切って、湖底から水面まで積み重ね「浮島」を作る。その浮島に集落がある。トトラを編んで作った家、学校、観光客用の店。建物の基礎部分が水っぽくなると2、3人でひょいと持ち上げ、乾いた所に移動する。

この浮島観光でサブライズがあった。10人くらいの小学生が整列して「証城寺の狸囃子」を披露してくれたのだ。みんな驚く。移民してきた日本人から教わったものだろうか。

住民はこの島で生まれて、他の島や大陸に出ることなく、亡くなっていく人もいるそうだ。住民たちの収入源は、湖で獲れる20センチ位の魚（ペヘレイ）を乾燥させたもので、彼らが必要とする塩、砂糖、パン粉などと交換する。島にはトイレがなく、トトラの島の端っこで大も小もして、そっと湖に流す。魚の餌になるそうだ。飲み水も湖からのものである。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「もう時効だから、すべて話そうか」

一橋文哉 著 小学館文庫

オウム真理教、三億円事件、世田谷一家惨殺事件、グリコ森永事件、和歌山毒カレー事件、餃子の王将射殺事件等々、過去の大事件の裏側が、事件記者の視点で細かく解説されている。犯人が検挙されず、暗雲に覆われた事件も、核心部まで鋭く切り込んでいる。世田谷一家惨殺事件や餃子の王将射殺事件には海外の暗殺組織が関与しているという「結論」に恐怖したが、そういう時代なのだ



と認識。「バーチャル化が進んだ現代社会では、五感を使う場面がどんどん減っている」と著者。「外に飛び出し人間に直接会って話を聞き、本物の風景を見る」泥臭い記者の迫力が満ちている。

「チリ交列伝」

伊藤昭久 著 ちくま文庫

軽トラの拡声器から「ご町内の皆様、毎度お馴染みのチリ紙交換でございます」の声があふれていた時代がある。家庭の新聞、雑誌、古本などの古紙を回収して、トイレトペーパーや化粧紙と交換する。チリ紙交換を略してチリ交（チリコー）と呼ばれていた。

問屋（立場、タテバ）が車や寮を用意して作業員を募集する。車の免許さえあれば、身体一つで稼げる商売なので、社会からはみ出した者たちが集まって来る。全盛期には一日10万円以上稼いだ猛者もいるが、酒や博打、女でスッカラン。愉快で哀しいアウトロー達の記録である。わたしもチリコーOBなのです。

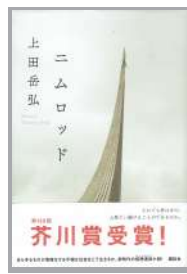


「ニムロッド」

上田岳弘 著 講談社

サーバーの保守会社に勤務する僕は、社長の特命を受けて、使っていないサーバーを使って仮想通貨・ビットコインの“採掘”を命じられる。一人だけの「採掘課」がスタート。大手企業に勤める年上の彼女は、遺伝子異常の胎児を中絶して、それが原因で離婚した過去がある。

ニムロッドは会社の先輩のニックネーム、作家志望だが受賞できずに鬱病になって名古屋に転勤。頻繁に送ってくるメールのタイトルが「駄目な飛行機コレクション」、失敗して消えた飛行機列伝だが、実態の乏しい現在の管理システム社会のアンチテーゼ？ 失敗を許容する社会の方が健全だと思えてくる。



ぐんぐん伸びよう会 (子どもの可能性は無限大∞)

当教室の特徴

- ・乳幼児～小学生を対象に、能力開発として個々の生徒の「可能性」の追求をする。
- ・母国語である国語を重点的に行うことで、**脳を活性化させて、思考の土台作りを行う。**
- ・算数・数学の基礎である 数感覚を身に付けることで、小学6年生までに必要な**四則混合を得意にさせる**
- ・年2回（夏・冬）、**暗唱音読会**を実施することで、**生徒の記憶する能力を高め、自信をつけさせる。**

無料体験受付中！！
気軽にご連絡ください。



教室：庄原市川西町 241

☎080-3631-9125

指導者：柳井妙子（やないたえこ）

どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

マスクして美女かも知れぬ女かな

近藤 昌平

引越して梟鳴く夜の遠くなり

富久光

薄氷うすらいの音も柄杓に掬いけり

片岡 正人

侘助は純白のままポロリとな

隆愚

煮えたぎる大き薬缶や去年今年

大槇 三代子

天井の闇より深き雪の音

赤川 冬人

真夜中の空の群青あおさよ久方に

松岡 初枝

父母や祖父父母の星を探しぬ

投稿&寄稿

旬の日

隆愚

「霞と霧」

日本の季節で七十二候というのがありますが、編集人と出版社により、少し違いがあります。「雨水の次候」を「霞(かすみ) 始めてたなびく」

の候といえます。新暦では、二月二十四日〜二十八日ごろ、というのと、二十三日〜二十七日というのがあります。

霞といえは春の風物詩ですが、氣象用語には「霞」はありません。あゝるのは、霧(もや)と霧(きり)と濃霧。この三つを視界の程度で使いわけています。

薄ぼんやりとたなびく霞と、目の前に深くたちこめる霧。春には、霞といい、秋には霧と呼びわけます。氣象学では、視程一キロ以下のものが霧。一般的には、それより薄いのが霞。「たちのぼる」は霧に使いますが、霞には使わず、「たなびく」はその逆です。なんとなく違いはわかっても、区別するのが難しいのが霞と霧。そして、夜には霞といわず朧(おぼろ)といえます。この庭のいずこに立つも霞かな

高浜虚子

「スタンプ」 赤川仁洋

巻頭の「芸備線ストロール」で、久しぶりに駅の記念スタンプを押しした。「DISCOVER JAPAN」と上部に刻まれている。この通称DJスタンプは、一九七〇年に全国の約千四百駅(船舶内・自動車駅を含む)に設置された。名称の間に矢印のマークが入ったものが初期のスタンプで、その後の第二弾は矢印の代わりにハイフンが入っているの、比婆山駅のスタンプは初版もの、作られてから半世紀以上の歳月が流れている。

駅スタンプの収集家のことを「押し鉄」というらしい。わたしも無意識のうちに押し鉄になっていたようで、かなりのスタンプが残っている。当時は、お金をかけない貧乏旅行ばかりで、スタンプに限らず無料のものなんでも記念に収集していた。自分のスタンプ帳を調べると、DJスタンプが二枚だけあった。木曾福島駅と横須賀駅。

それにしても、DJスタンプのことをネットで検索して驚いた。オークションやフリマサイトでかなりの数が売買されている。一枚七十円とかの金額だが、数が多いとそこそこの値段をつけている。想い出はお金では買えないと思うのだが(苦笑)。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

2月9日の「九日市」中止のお知らせ

コロナ禍の第6波が襲来、先の状況が見通せない中、1月に続いて2月も、九日市の開催はリスクが高いと運営会議で判断、中止の決定をいたしました。

1月の九日市では、前日の8日に庄原市より自粛要請があり、急遽中止が決定。お客様だけではなく、食料品販売の出店者の方からも、かなりの損失が出たとの報告が届いています。ご迷惑をおかけして、本当に申し訳ございませんでした。

3月以降の開催を祈念、よろしくお願ひします。

令和4年2月 九日市愛好会

東日本大震災復興祈願法要 藤江潤土 LIVE

日時：2月27日(日)
場所：萬福寺(庄原市是松町227)
TEL：0824-72-0292
※入場無料(会場に募金箱を設置しています)

- スケジュール -

13:00 チーズ「ふくふく牧場」
革職人「tears of clown」
アクセサリー「ハンドメイド☆Kei」
喫茶「萬福寺」(カフェ・マウンテン)

14:00 坐禅と法要

15:00 藤江潤土ライブ

- ・入場時にマスク着用、手の消毒&検温を実施。
- ・コロナ感染拡大の場合は中止します。



藤江潤土プロフィール：
広島県出身。1979年4月27日生。幼少期からクラシックピアノを学び、中学生でギターに出会う。20才からボーカルとして活動をスタートさせ、現在は「音楽家」として活動。

編集後記

◇コロナ禍の第6波が襲来、芸備線ストロール、降雪を心配して早めに取材したのですが、県内全域に「まん延防止等重点処置」が適用される前で良かったです。さて、2月は

どうなるか……。
◇前回、備後西城駅の「E K INAKA」は定休日でしたが、日・月曜日、と書きましたが、手打ち蕎麦は火曜日限定で、現在はコロナ禍もあり休業中です。初期配布のものは訂正していません。申し訳ありませんでした。
◇庄原の不確かな歴史ドラマは作者体調不良で休載です。
◇どら書房は、毎年2月は店内整理で休業します。新鮮な気分、3月の再開(再会)を楽しみにしています。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会